65. 高校野球

NHK-TV で「“沖縄が嫌だった”元高校球児が贈る 60 年越しのメッセージ」をみた。

60 年前の夏、宮崎県営野球場で行われた「南九州大会」の決勝戦、宮崎代表の大淀高校と沖縄代表の沖縄高校が甲子園をかけて戦った試合で、敗戦投手となった人の話だ。感動するいい番組だった。少し記せば次のようだが、短文では舌足らずでうまく伝わらないかと心配だ。

不動のエース三浦健逸氏（78）を擁する大淀高校が勝つという前評判だったが、異様な雰囲気にのまれた大淀高校は負けてしまった。沖縄高校には祝福の大歓声。地元で敗れた大淀高校には心無い声も。三浦さんは、敗戦の屈折の思いを長く抱え続けた。まさに「たかが野球、されど野球」だった。転機は 40 年余りたった還暦での沖縄旅行。そこで心を震わせる出来事が起きたという。観光バスが予定していなかった経路を進み、かつての沖縄高校の前を通りかかったとき、「ここが沖縄が初めて甲子園に行った沖縄高校、ピッチャーは安仁屋投手。プロ野球に行って活躍。沖縄県民にとって最大の喜びごとがここなんです」とドライバーとガイドの言われたことに、野球に、沖縄に心に閉ざしたままだった三浦さんは、40 年以上たってもなお沖縄の人達があの試合を誇りに思っていることを知り、その瞬間に心のわだかまりが溶けた、というのだ。

当時の沖縄はまだアメリカ統治下で宮崎に来るにはパスポートが必要な時代だったので、球場全体が沖縄高校を応援する熱気に包まれていたともいわれる。17、18 歳の球児の一挙手一投足の結果が社会的背景に影響されていたということだろうか。結構重い内容だ。

7 月 22 日（金）、昭島球場で行われた西東京大会の国学院久我山高校と八王子高校との試合を見に行った。雨の影響で 1 時間程開始が遅れたが、久し振りの夏の高校野球の見学でそんな事は苦にならなかった。

試合は 1 点差を追う逆転逆転逆転で、その過程にホームラン・二塁打・盗塁・スクイズ・ヒットエンドランとファインプレー・エラーなど攻守に見応えがある試合だった。フォアボールの多いのが気になったが、そこはまだ高校生のやることと我慢し、全体としては見応えのある試合だった。逆転やチャンスを迎えるとスタンドは盛り上がり、相手は対照的に静かになるのも必然だが、第三者にはそれも面白い。

土壇場の 9 回 2 死から 1 点をもぎ取り延長にもつれ込んだが、10 回裏にサヨナラヒットで劇的な幕となった。飛び上がる選手と泣き崩れる選手のいるのはいつもの光景だが、見ている方も胸が熱くなるのを感じ、また少し若返った気もする。

勝った久我山も次は逆になる可能性が高くなり、最後の頂点まで行き歓喜に終わる選手は一握りであるのは当然だ。が、人生それが一番良いと言い切れないのがまた人生だ。考えように依っては、然るべきところで挫折を経験するのは優勝より価値のあることのように思えるのは年齢のせいばかりではないだろう。

高校野球にも、選手の集め方・学業との両立・費用・猛暑での試合等々問題はあるのだろうが、多くの人達から愛されているのも事実だ。球場に行くとオールドファンも結構いる。

私は中学のとき野球をやっていたので、内心「高校でも」と思っていたが、その練習を聞くにつけ怖じ気づいて、とても入部出来ないと思った。当時の練習は半端ではなく、それこそ盆と正月以外は毎日の練習であった。毎日暗くなるまでの練習だった。それでは勉強どころではなく正直、理不尽さも感じた。結局私の高校野球の原点は見ること、応援でしかなかった。

昭和 36 年の高校１年の夏というと 61 年前になる。5～6台のバスで大宮球場（埼玉県）に応援に行った。初めて見る本格的な球場と選手らの試合前の動き、それに応援合戦等にまず感激したのを覚えている。

試合は先制点を得て有利に進めていた（と思う）。回は押し詰まっていたように思うが、応援団の一人が「松原、まだ打ってないぞ」と打席の方に向かって大声で叫んだ。松原選手の同級生だったのだろう。松原選手にその声が聞こえたかどうかはわからないが、応援席にいた多くの学生がその声を聞いていた。その直後に打ったのは左翼席に入るホームランだった。応援に来ていた 300 名の学生たちは沸きに沸いた。松原選手の名前は当時既に多くの学生が知っていた。

一塁側の応援席にいた私には打球の行方がよく見えた。敢えて言えば、打球は高くも低くもなく、きれいな理想的な軌道を描いて左翼席に入ったように覚えている。球場は左翼席といってもそこは芝生で観客はまばらだった。その光景は 61 年経っても脳裏に確かに刻まれている。

期待されている打者が打った瞬間には一瞬の静寂さが伴った。大きい当たりだとわかると直ぐにどよめきが生じ、ボールが左翼席に入った瞬間に最高潮に達した。しかし、次の光景をみて応援席は少し静かになったように感じた。そしてわずかの間のあとに拍手が巻き起こった。松原選手は捕手だからわからなかったが、怪我をしていて足をひきずりながら、ゆっくりとグラウンドを廻りはじめた。足首の怪我で片足はスパイク、片足は運動靴だった。このことも脳裏に刻まれている。試合は快勝だったが、相手チーム名もスコアも覚えていない。

この経験が高校生活の中でも大きな印象として残り、社会人となっても何回となく思い出し、その度に幸せな気分になった。その影響か、40 代 50 代 60 代になっても年一回は甲子園の予選大会の好カードを目指して見に行くようにしていた。ここ数年はコロナのこともあるが、流石に炎天下の試合は躊躇するようになって見学しなかったが、今年は思い切って出掛けてみたという訳だ。

前述の試合等を、大宮図書館でマイクロフィルム越しに当時の新聞を見た。２回戦で上尾高校と対戦し、5 対 2 で快勝していた。続く３回戦は川口工に 12 対 2 で快勝し、準々決勝でシード校の慶応志木に 2 対 0 で快勝。記事も「慶応志木ついに破れる、飯能調子づく」と踊っている。しかし準決勝で熊谷商工に 1 対 0 で惜敗していた。私は準々決勝までの 3 回を応援に行ったと思うが、確かな記憶ではなくなってしまった。母校（飯能）はその後この成績を上廻っていないと思う。

なお、松原選手はその後プロ野球に入り、大洋ホエールズで四番打者として活躍し、その後巨人に移籍し、プロ野球の選手会長も引き受け、選手達の労働条件の改善に尽くした。生涯安打 2,095 本、打率 2 割 7 分 6 厘、ホームラン 331 本と活躍し、名球会入りを果たした。

来年もまた夏の予選を是非見に行きたいと思う。

・夏予選カキーンと飛ぶ左翼席

・マウンド上天を仰ぎし夏球児

（2022 年 7 月 24 日）